

## 看護学生の高齢者虐待への認識（第2報）

—紙上事例 認知症高齢者への対応—

木下 香織<sup>1)</sup>\*・古城 幸子<sup>1)</sup>・馬本 智恵<sup>1)</sup>

1) 看護学科

(2008年11月12日受理)

本研究の目的は、認知症高齢者への対応に関する紙上場面で、学生が高齢者虐待と認識する判断理由を分析し、教育上の課題を明らかにすることである。看護学科1～3年生を対象に、認知症高齢者への対応場面についての虐待認識の調査結果を学年の違いとの関係で検討した。紙上場면을虐待と認識する学生は学年が上がるごとに少なく、虐待と認識する理由は学年とともに学生個人としての判断が減少し、専門職としての知識や感性を理由に挙げる学生が多かった。虐待と認識しない学生はわずかであったが、虐待かどうか分らないと回答した学生は学年が上がるほど多く、その理由では紙上場面の対応に違和感を示すカテゴリーも抽出された。学生は、看護学の学習が進むにつれて、知識を根拠に虐待かどうか判断する一方で、『虐待』の定義があいまいになる傾向がうかがえ、『虐待』の定義と具体的な場面が結びつくような教育方法が課題であると考えられた。

(キーワード) 高齢者虐待 認識度 認知症高齢者 看護学生

### はじめに

我が国はすでに高齢社会に突入し、後期高齢者の増加に伴って認知症高齢者数も急速に増加すると予想されている。2004年12月には「痴呆」から「認知症」へと用語が変更され、2005年からは認知症のひとが尊厳をもって地域で暮らし続けることを支える運動として「認知症を知り地域をつくる10カ年構想」が展開されている。その一方で、家庭内における高齢者虐待に関する調査では、虐待を受けた高齢者の8割が認知症高齢者で、虐待の背景には高齢者と虐待者の人間関係のほか、認知症による行動障害やそれに伴う介護負担が関係すると報告されて<sup>1)</sup>おり、在宅の認知症高齢者を対象に介護負担感と虐待との関係に焦点を当てた研究もいくつか報告されている<sup>2)3)4)</sup>。

2005年11月9日に制定された「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」(以下、高齢者虐待防止法と略す)では、法律の対象者を①高齢者を現に養護する者、②要介護施設従事者等と定められており、家庭内だけでなく、施設や在宅サービス事業の従事者等による虐待もその対象となっている。要介護施設従事者等の一員として、虐待の防止、発見と高齢者への対応に関する責任を理解し、状況認知や対処力が低下している認知症高齢者の尊厳の保持を図る援助を提供することは、認知症高齢者の看護における倫理として重要<sup>5)</sup>である。

今回、認知症高齢者への対応についての紙上事例を用いて看護学生の虐待認識とその判断理由を調査した。学習進度との関係を分析した結果、学年が上がるごとに紙上場면을虐待と認識する学生は少なく、専門職としての知識や感性を理由に挙げる学生が多かった。虐待かどうか分らないと回答した学生も学年が上がるほど多く、看護学の学習が進むにつれて学生は、知識を根拠に虐待かどうか判断する一方で、『虐待』の定義があいまいになる傾向がうかがえた。高齢者虐待についての知識を深めるとともに、個人の倫理的感受性と虐待の発見や対処ができる職場風土を育むための教育の重要性が示唆された。

### I. 研究目的

認知症高齢者への対応に関する紙上事例での看護学生の高齢者虐待の認識とその判断理由を調査し、教育上の課題を明らかにする。

### II. 研究方法

1. 研究対象：2007年度A短期大学看護学科1～3年生185名。そのうち、1年生62名、2年生64名、3年生22名から回答が得られた(回収率80.0%)。

2. 調査方法：西元ら<sup>6)</sup>が作成した6場面の紙上事例で

\*連絡先：木下香織 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

作成した調査用紙を老年看護学Ⅰ（１年次後期）・老年看護学Ⅱ（２年次後期）および老年看護学実習（３年次後期）の終了時に配布、後日回収箱への投函を依頼した。調査に用いた６場面は、①身体的虐待、②世話の放任、③心理的情緒的虐待、④性的虐待、⑤経済的・物質的搾取、⑥自虐の内容で、場面ごとに「この場面を虐待と思うか」と質問し、“認識する”、“認識しない”“分からない”の三択とその理由を自由記述で求めた。本報では、事例③「認知症で何度も繰り返し訴える利用者をいつものことだからと思い、スタッフが無視して会話をしなかった」を分析対象とした。なお、この時期の学生は、各学年に履修した専門科目の中で倫理や虐待に関する知識を段階的に得ている。

３．分析方法：認識の理由の記述内容を１文１意味でコード化し、その類似性に基づいて研究者間で検討し、選択肢ごとにカテゴリー化した。

４．倫理的配慮：調査用紙に用いた事例は作成者にその使用についての了解を得た。調査は無記名とし、対象者に、口頭と紙面にて研究の目的、匿名性の保持、調査協力の有無が成績評価とは関係のないことなどを説明し、回収によって同意を得たと判断した。

### Ⅲ．結果

#### １．認知症高齢者への対応の紙上場面における学生の虐待の認識度

認知症高齢者への対応場面に対する学生の回答を図１に示した。“認識する”と回答した学生は、１年生59名（95.2%）、２年生53名（82.8%）、３年生15名（68.1%）であった。“虐待と認識しない”は２年生2名、３年生1名のみであった。“分からない”と回答したのは１年生3名（4.8%）、２年生9名（14.1%）、３年生6名（27.3%）で、学年が上がるにつれてその割合が増えていた。

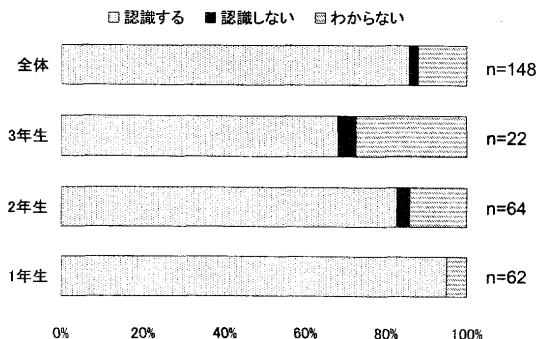


図１ 認知症高齢者への対応の紙上場面での虐待の認識

#### ２．認知症高齢者への対応場面における学生の虐待認識の理由

##### １）虐待と“認識する”理由

虐待と“認識する”理由は、127名から176件の記述があった。記述内容の類似性を検討した結果、11サブカテゴリー、4カテゴリーが形成された(表1)。以下、【】はカテゴリー、〈〉はサブカテゴリーを、「」はコードを表す。また、コードに付した「1:」は1年生の記述、「2:」は2年生、「3:」は3年生の記述を意味する。

4つのカテゴリーは、【学生個人としての判断】【認知症の知識に基づいて判断】【専門職として求められる役割から判断】【倫理的な問題を理由に判断】で、学年が上がるほど学生個人としての判断は減少し、専門職としての知識や感性を理由に挙げる学生が多かった。

【学生個人としての判断】は、3つのサブカテゴリー〈学生個人の経験から〉〈無視された高齢者の気持ちに共感して〉〈特別な理由はなく虐待と判断〉で構成されていた。〈学生個人の経験から〉は、「1:実際に自分の祖母がこのような状態で、家族から見ても痛々しかった」「2:何度もこのような場面を見かけたことがある」と記述があった。学生は、今での生活や臨地実習での経験とその時の感情をもとに判断していた。〈無視された高齢者の気持ちに共感して〉は、「1:無視された高齢者はどんな気持ちだろう」「2:無視は誰でも傷つくので虐待に入と思う」などの記述があり、学生は事例の認知症高齢者の立場に立って判断していた。〈特別な理由はなく虐待と判断〉は、「1:どんな場面であれ、無視することは心理的虐待になる」「2:無視は精神的虐待である」「3:無視することはどんな人に対しても虐待、いじめ、嫌がらせになると思う」などの記述で、特に1年生に多く記述されていた。

【認知症の知識に基づいて判断】は、2つのサブカテゴリー〈繰り返しの訴えは高齢者からの大切なメッセージ〉〈認知症の症状を理解した対応が必要〉で構成されていた。〈繰り返しの訴えは高齢者からの大切なメッセージ〉は、「1:利用者が繰り返す訴えには何かのメッセージが込め

表１ 虐待と“認識する”理由

表1 虐待と認知症の関係		コード数:176		
カテゴリー	サブカテゴリー	各学年のコード数		
		1年	2年	3年
学生個人としての判断 (30)	学生個人の経験から(2)	1	1	0
	無視された高齢者の気持ちに共感して(6)	4	2	0
	特別な理由はなく、虐待と判断(22)	17	3	2
認知症の知識に基づいて判断 (47)	繰り返しの訴えは 高齢者からの大切なメッセージ(32)	11	14	7
	認知症の症状を理解した対応が必要(15)	9	4	2
専門職として求められる 役割から判断 (61)	訴えを聴くことが必要な対応だから(7)	6	1	0
	訴えを聴くことはケア提供者の役割だから (29)	14	13	2
	専門職として不適切な行動(18)	8	8	2
	高齢者や家族に 苦痛や不快感を与えるから(7)	4	3	0
倫理的な問題を理由に判断 (38)	認知症高齢者への偏見が 虐待につながっている(8)	6	2	0
	倫理的な問題だから(30)	9	15	6

( )内の数字は、各カテゴリー、サブカテゴリーのコード数

られているかもしれない」「1：体調に変化があるのかもしれない」「2：利用者は何か訴えたいことがあると思う」「3：認知症高齢者の繰り返す行為には必ず意味がある」と、3学年に共通して認知症高齢者の言動の意味の理解の重要性が記述されていた。〈認知症の症状を理解した対応が必要〉は、「1：何度同じことを言っている、その人にとっては初めてであるのが認知症の症状だから」「2：認知症高齢者本人は同じ訴えを何度も言っていると思っていないので、1回ずつきちんと答えなければいけないと思う」「3：繰り返される言動の意味を明らかにし援助することで、繰り返しの言動は減っていくと思う」など、認知症の記憶障害を理解した記述であった。

【専門職として求められる役割から判断】は、4つのサブカテゴリー〈訴えを聴くことが必要な対応だから〉〈訴えを聴くことはケア提供者の役割だから〉〈専門職として不適切な行動〉〈高齢者や家族に苦痛や不快感を与えるから〉で構成されていた。〈訴えを聴くことが必要な対応だから〉は、「1：同じことであっても傾聴することが大切である」「2：認知症であってもその人が発している言葉に対しては耳を傾ける必要があると思う」などの記述であった。〈訴えを聴くことはケア提供者の役割だから〉は、「1：話はきちんと聞くことが大事だと思う」「2：利用者の訴えにはきちんと対応する義務があると思う」などであった。〈専門職として不適切な行動〉は、「1：認知症だと理解したうえでやっているのだから虐待になる」「2：無視することは訴えを受け入れていないことだと思う」などの記述であった。〈高齢者や家族に苦痛や不快感を与えるから〉は、「1：相手に無視されたという嫌な印象を与えるのではない」「2：無視するのは利用者を寂しい気持ちにさせると思うから」などであった。いずれのサブカテゴリーも、1、2年生の記述が中心であった。

【倫理的な問題を理由に判断】は、2つのサブカテゴリー〈認知症高齢者への偏見が虐待につながっている〉〈倫理的な問題だから〉で構成されていた。〈認知症高齢者への偏見が虐待につながっている〉は、「1：認知症だから無視するというのはおかしい」「2：認知症だからということだけでスタッフが壁を作っているような気がする」などで、3年生には記述はみられなかった。〈倫理的な問題だから〉は、「1：無視は人権侵害にあたる」「2：無視はその利用者の尊厳が守られていない行為だから」「3：無視することは人として尊重されていない」など、3学年とも認知症高齢者の人権に関わる対応だと指摘する記述であった。

## 2) 虐待と“認識しない”理由

虐待と“認識しない”理由は、3名から3件の記述があった。「2：このような場面に出会ったことがあり、初めのうちはひどいと感じたが、何度も尋ねる認知症高齢者に毎日接するスタッフも大変だと感じた」「2：虐待まで

表2 虐待かどうか“分からない”理由

コード数:23

カテゴリー	サブカテゴリー	各学年のコード数		
		1年	2年	3年
虐待かどうか判断できない(10)	判断に迷う(10)	1	5	4
学生個人としての判断(1)	学生個人の経験から(1)	1	0	0
スタッフの行動に共感する(5) 専門職の対応として不適切と感じる(4)	スタッフの行動も理解できるから(5)	1	4	0
	訴えを聴くことが必要な対応だから(1)	0	1	0
	訴えを聴くことはケア提供者の役割だから(2)	1	1	0
	高齢者に不快感を与えるから(1)	0	0	1
倫理的な問題だと感じる(3)	認知症高齢者への偏見が虐待につながっている(1)	0	0	1
	倫理的な問題だから(2)	0	2	0

( )内の数字は、各カテゴリー、サブカテゴリーのコード数

はいかないと思うが、ひどい行為だと思う」「3：虐待行為であるとは思わないが、話に耳を傾ける必要がある」との記述であった。

## 3) 虐待かどうか“分からない”理由

虐待かどうか“分からない”理由は、18名から23件の記述があり、8サブカテゴリー、5カテゴリーに整理できた(表2)。5つのカテゴリーは、【虐待かどうか判断できない】【学生個人としての判断】【スタッフの行動に共感する】【専門職の対応として不適切と感じる】【倫理的な問題だと感じる】で、虐待とは認識しないながらも、紙上場面の対応に違和感を示すカテゴリーも抽出された。

【虐待かどうか判断できない】は、〈判断に迷う〉で形成した。「2：あまり良いことだとは思わないが、それが虐待であるかどうかは分からない」「3：これを虐待というのかどうか分からない」などで、2、3年生を中心とした記述であった。

【学生個人としての判断】は、〈学生個人の経験から〉で形成した。「1：実際にこのような場面はよく見る」と記述されており、遭遇した経験はあるが判断できないと内容であった。

【スタッフの行動に共感する】は、「毎日このような状況ならばその対応をしてしまうと思う」などの記述からなる〈スタッフの行動も理解できるから〉で形成した。

【専門職の対応として不適切と感じる】は、3つのサブカテゴリー〈訴えを聴くことが必要な対応だから〉〈訴えを聴くことはケア提供者の役割だから〉〈高齢者に不快感を与えるから〉で構成されていた。〈訴えを聴くことが必要な対応だから〉は、「2：何か別のことを訴えているのかもしれないので、しっかりと聞いてから対処する必要がある」と記述されていた。

〈訴えを聴くことはケア提供者の役割だから〉は、「2：ただ無視をするのではなく、またあとで聞かせてくださいなどの対応があってもよいと思う」と、具体的な

対応方法を示す記述であった。

〈高齢者に不快感を与えるから〉は、「虐待かどうかは分からないが、利用者がとても不安になると思う」という記述であった。

【倫理的な問題だと感じる】は、“認識する”と同じ2つのサブカテゴリー〈認知症高齢者への偏見が虐待につながっている〉〈倫理的な問題だから〉で構成されていた。〈認知症高齢者への偏見が虐待につながっている〉は「3：虐待というよりも認知症だからという差別的な感情があると思う」、〈倫理的な問題だから〉は、「2：利用者が人として扱われていないような気がして分からない」などの記述であった。

#### IV. 考察

##### 1. 専門職の認識との比較

本研究で使用した事例を作成し、施設スタッフに調査を実施した西元ら<sup>7)</sup>の調査（以下、西元調査とする）の結果では、看護師の76.2%が虐待と“認識する”と回答しており、“認識しない”が16.7%、“分からない”が16.7%であった。学生全体では、“認識する”との回答は85.8%を占め、看護専門職よりも看護学生のほうが虐待認識の割合が高い結果であった。

虐待と“認識する”理由について、西元調査では、「無視することは虐待である」「会話を聞き話をするべき」「利用者を不安にする・傷つけるから」「利用者ははじめての話とっていない」「何を訴えているか考えるべき」との記述であった<sup>8)</sup>。これらの記述は、学生が虐待と“認識する”理由での自由記述から形成したサブカテゴリー〈特別な理由はなく虐待と判断〉〈訴えを聴くことはケア提供者の役割だから〉〈高齢者や家族に苦痛や不快感を与えるから〉〈認知症の症状を理解した対応が必要〉〈繰り返しの訴えは高齢者からの大切なメッセージ〉とそれぞれ一致する内容であった。また、〈無視された高齢者の気持ちに共感して〉〈専門職として不適切な行動〉〈認知症高齢者への偏見が虐待につながっている〉など、倫理的な問題の所在を理由に挙げたのは看護学生であった。

この事例は、「心理情緒的虐待」と判断されやすい事例として設定されている。虐待を否認あるいは虐待かどうかの判断に迷った学生も、〈専門職の対応としては不適切とを感じる〉〈倫理的な問題だと感じる〉のサブカテゴリーにまとめられる記述をしており、事例で示されたスタッフの対応の不適切さを指摘していた。臨地実習で学生が看護ジレンマを感じる背景の一つとして、学生が専門職というよりも高齢者の家族に近い立場で理想原則に基づくことが示唆されている<sup>9)</sup>。高齢者虐待の認識においても、学生の青年としての人間的な感性が虐待への感度も高めていることがうかがえた。

##### 2. 学生の学年間での比較と今後の教育上の課題

学年が高い学生のほうが虐待と“認識する”割合が少なく、学年が上がるとともに“分からない”学生が増えていた。

虐待と“認識する”理由は、1年生では〈特別な理由はなく虐待と判断〉を中心とした【学生個人としての判断】、〈訴えを聴くことはケア提供者の役割〉を中心とした【専門職として求められる役割から判断】を挙げた者が多かった。2年生、3年生では共通した傾向があり、〈繰り返しの訴えは高齢者からの大切なメッセージ〉を中心とする【認知症の知識に基づいて判断】、〈倫理的な問題だから〉を中心とした【倫理的な問題を理由に判断】を挙げた者が多かった。2年生では、加えて〈訴えを聴くことはケア提供者の役割〉を中心に【専門職として求められる役割から判断】を挙げた者も多かった。初學者ほど学生自身の感性を根拠に判断し、看護学の知識の増加に伴って、看護師の役割や認知症高齢者への対応のあり方、看護実践における倫理などの専門的な知識を根拠にする傾向がうかがえた。

しかし、その一方で、看護学の学習が進むにつれて、『虐待』の定義があいまいになっている可能性も推察された。高齢者虐待防止法では、「高齢者が他者からの不適切な扱いにより権利利益を侵害される状態や生命・健康・生活が損なわれるような状態に置かれること」ととらえた上で、対象となる行為を①身体的虐待②介護・世話の放棄・放任③心理的虐待④性的虐待⑤経済的虐待行為と規定している。学年が高いほど専門的知識を判断根拠にする傾向があることは、調査で示された事例はいずれの行為にあたるのか判断しようとするためか、事例の対応に違和感を覚えながらも虐待とは認識しない結果となっている。また、臨地実習での経験を重ねた学生は、紙上事例の限られた情報だけでは判断できないと考えている可能性もあり得る。そこで、今後の教育上の課題としては、学生の高齢者虐待についての知識を深め、学生が感じた違和感を分析することで経験の意味付けができる教育支援が重要である。具体的には、臨地実習での日々の経験の意味付けを行うことであり、施設内や学内でのカンファレンスやジレンマ日誌<sup>10)</sup>の活用が考えられる。学生が自己の経験やそれに伴う感情を自由に表現できる場をつくることは、学生と教員がその多様な価値観に触れる機会となり、個人の倫理的感受性を育てるとともに、虐待の発見や対処ができる職場風土づくりのための教育としても重要であると考えられる。

また、3学年ともに、虐待と“認識する”理由に、〈繰り返しの訴えは高齢者からの大切なメッセージ〉〈認知症の症状を理解した対応が必要〉を挙げていた。長畑ら<sup>11)</sup>は、認知症高齢者の対応困難な言動に対して看護師がネガティブな感情を抱くこと自体は自然なこととしながら

も、専門職としては感情レベルでの反応だけでなく、その言動の意味を理解していくことが重要だと述べている。学生は、認知症高齢者の言動の理解することの大切さと感情に流されない専門的な知識に基づいた対応の必要性を虐待認識の判断根拠としていることがうかがえた。学生の認知症高齢者への対応についての感性和理解は評価できるものであり、学生の持つ力を引き出し伸ばしていける教育を心がけていきたい。

#### 謝辞

本研究に事例の使用を了解してくださった西元幸雄氏と共同研究者の皆さま、調査に協力してくださった学生の皆さまに心から感謝いたします。

#### 文献

- 1) 厚生労働省 (医療経済機構) 調査検討委員会: 家庭内における高齢者虐待に関する調査 (平成15年度老人保健健康増進等事業). 2004
- 2) 緒方智子, 三原博光: 痴呆性老人に対する虐待の問題とその予防について. 山口県立大学看護学部紀要, 7, 149-153, 2003
- 3) 中村京子, 本川真弓: 老人虐待・事故を防ぐ地域看護の課題 痴呆高齢者の傷害・殺人事件判例からの示唆. 日本看護学会論文集: 地域看護, 34, 76-78, 2004
- 4) 柳漢守, 桐野匡史, 金貞淑ほか: 韓国都市部における認知症高齢者の主介護者における介護負担感と心理的虐待の関連性. 日本保健科学学会誌, 10(1), 15-22, 2007
- 5) 中島紀恵子責任編集, 太田喜久子ほか編集: 認知症高齢者の看護. 9-15, 医歯薬出版, 2007
- 6) 西元幸雄, 小林好弘, 紀平雄司ほか: 高齢者施設における虐待の構造分析. 老年社会科学, 28(4), 522-53, 2007
- 7) 前掲6) と同じ
- 8) 前掲6) と同じ
- 9) 古城幸子, 木下香織, 馬本智慧: 老年看護学実習での学生の看護ジレンマ - ジレンマの対処過程と教育的対応 -. 新見公立短期大学紀要, 25, 63-71, 2004
- 10) 前掲9) と同じ
- 11) 長畑多代, 松田千登勢, 佐瀬美恵子ほか: 介護老人保健施設で働く看護婦の痴呆性高齢者とその言動に対するとらえ方. 大阪府立看護大学紀要, 8(1), 19-27, 2002

### **Nursing students' recognition of elderly abuse (Second report): Using a picture-based account of treating a cognitively-impaired elderly person**

Kaori KINOSHITA, Sachiko KOJO, Tomoe UMAMOTO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

#### Summary

This study aimed to examine the reasons for nursing students to judge a picture-based account of treating a cognitively-impaired elderly person as representing elderly abuse, and clarify the educational aspect of this issue. A survey on the recognition of abuse in such a scene was conducted among first- to third-grade students of the nursing department, and the results were analyzed by grade. The number of students who recognized abuse in the picture-based account decreased with grade, and the reasons they recognized abuse were more frequently based on personal views in lower graders, and professional knowledge and sensibility in higher graders. While there were few students who did not recognize abuse in the scene, the number of students who answered that they could not determine whether it was abuse or not increased with grade, and, as a reason for the latter, even a category representing students' discomfort about the treatment in the picture-based account was extracted. These findings suggest that, as they advance in the nursing curriculum, students tend to recognize abuse based on their knowledge while becoming unsure about the definition of "abuse." An educational method that allows students to relate the definition of "abuse" to specific scenes may be necessary.

**Key words:** elderly abuse, recognition level, cognitively-impaired elderly person, nursing student